

ナザリツクと私

梨樹

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

オーバーロード二次創作です。

るし★ふぁーさんの置き土産から始まる異世界転生。モモンガさんは無事、原作と同じくナザリックの主として振る舞っていただけるのだろうか。

と、あらすじは適当に楽しんでいただければ幸いです（・ω・）>

目次

ユグドラシルと私	—	1
序章		
王国戦士長と私	(一)	9
王国戦士長と私	(二)	19

ユグドラシルと私

るし★ふぁーという男がいた。

彼はギルド内の問題児で、度々いたずらをしてギルドメンバーを驚かせている姿はゴーレムクラフターと言うよりトラブルメイカーと呼んだ方が似合っていた。

しかも彼のいたずらの内容は、恐怖公というNPCを作ったときに、女性メンバーに転移の罫を踏ませて黒^{ブラック・カプセル}棺に落としてみたり、こつそりメンバーのメイン武器をゴーレムの一部として取り出し不可能にしたりと、かなりえげつない。それは基本的に穏やかで誰とでも仲良くなるギルド長のモモンガでさえも、彼には苦手意識を持っていたほどに。

ある日、そんな彼はいつになく深刻な顔をして現れたが、モモンガはその時、心の準備が出来ていなかった。全く予想していなかったのだ。だから、ただいつもみたいになにかしてくるんじゃないかと普通にいたずらを警戒していた。

あの時彼の口から出てきた言葉を理解するのに、どれくらい時間がかかっただろう。

「俺、次いつログインできるかわかんねーわ」という言葉を。

唐突過ぎて動揺したし、とても慌てた。彼はいたずらをするために嘘をつくが、いたずらとして嘘をつくことはなかったのだ。それに、理由となった事情も説明されてしまったのだから、疑うことも出来なかった。

その後、自分は何といったのだろうか。よく覚えてないが、いつでも帰ってきてください。とでも言った気がする。そして、最終ログインが一週間になり、一ヶ月になり、一年になった。

ユグドラシルの最終日。淡い期待を込めて送ったメールに伝えてくれたのは何人だっただろうか――

「なーに黄昏ちやってんの☆ モモンガさん!」

「うわっ!? る、るし★ふぁーさん! 来てくれたんですか!」

背後から視界一杯に現れたるし★ふぁーにモモンガは心の底から叫んだ。円卓の間

ラウンド・テーブル

の席に座りながらギルメンを待ち、誰も来ないままに数時間を経過していたので完全に油断していた。それに、るし★ふぁーへもちろんメールは送ったが、今日まで返事は無かったのだ。そんな人がまさか一番乗りで来てくれるとは思っていなかった。

モモンガは年甲斐もなくはしやいでしまう自分を恥ずかしいと思う反面、今日くらいは良いだろうと思う。

「0時まではいれないんだけど、何とか来れたんだよね」

「そうですか……」モモンガの声は一瞬だけ影を落としたが、笑顔のアイコンを送る。
「でも、るし★ふぁーさんとまた会えてうれしいです」

「俺ですよ！ しかも、二人しかいないなら、今まで我慢してきた事も出来ますしね」
ニヤリと笑うるし★ふぁーの顔に嫌な予感がする。この顔は面白いはずらを考えている時の顔と一緒なのだ。

モモンガが警戒して身構えた瞬間、るし★ふぁーは目の前で手を合わせ、深々と頭を下げる。

「モモンガさんの世界級ワールドアイテム持たせて！」

「……………え？」

「だってそれモモンガさん専用のアイテムだから俺使えないし、見た目格好良いのにモモンガさんのお腹の中にずっと入ってるじゃん！俺もどんな感じか見てみたかったのにー！」

最初は予想外すぎて啞然としてしまったが、理由を聞いてるうちに思い出した。モモンガだって誰にも見せ無かったわけではない。ギルメンの中の見たがっていた人には見せていたが、その最中に「ゴーレムに入れてみたら強そう！」とか言い出したので指一本触らせなかったのだ。

「——まあ、そうですね。最終日ですし別に良いですよ。けど、お願いするならもつと怖いことかと思つちやいましたよ」

モモンガは肋骨の奥、心臓にしてはやや下過ぎる位置にあるそれを装備解除する。るし★ふあーの手に乗せられると、途端に力を失ったように赤黒い光が消えた。それを面白そうに眺めていたるし★ふあーは鑑定魔法をかけたリ投げしてみたりしている。

「やつぱり世界級アイテムつて強かつたですよ！　うちのギルドに侵入してきた奴ら全滅させましたし」

「あれは皆さんとヴィクティム。あとナザリックの力があつたからですよ。まあそれが要因になつたのも事実ですけど」

「まーね☆　けどこれの情報は結局wikiにも載らなかつたつて破格すぎだよほん」と

その時は、アインズ・ウール・ゴウンの全盛期でメンバーもほぼ全員が参加していた、一番楽しかつた時とも言える。またみんなで集まれたら、どれだけ嬉しかつたか。

「まーた落ち込んだんじゃないよ……」るし★ふあーはその手に持つアイテムをこつそりと自分のストレージにしまい、別のアイテムを取り出す。「モモンガさん！」

「はい？」

『モモンガさんのアバターを女性に変える!!!』

るし★ふあーの持っていたアイテムはモモンガの全く知らない物。それは短杖ワンドの先にいたずらに笑うるし★ふあーのアバター、その頭が取り付けられており、自作のように見えた。頭から迸る光がモモンガのアバターを包み込み、一瞬《閃光》フラッシュを受けたように視界がホワイトアウトする。

「えー……っ!?!」

「やべっwwwwwwほとんど変わらねえwww」

心なしか骨格が変わった死オーバーロードの支配者を見るし★ふあーは爆笑している。

「もー、なんなんですか？ これ」若干起こり気味のモモンガがるし★ふあーに詰め寄る。

「え？ 俺専用ワールドの世界級アイテム☆」

「うっそ……」

「嘘じゃないって☆ ログイン出来なくなる少し前に運営から貰ったんだよね。一応これ、運営お願い系としても使えたんだよ?」

「なんでこんな、取得条件は？ るし★ふあーさん何かしてましたか!?!」最終日だと言うのに興味深々なモモンガに、だかるし★ふあーは何ともないように。

「ん？ いたずら☆」と、さも楽しそうに言った。

「じゃあモモンガさん。今日は楽しかったです。——今までありがとうございました」
最後まで残ってくれたハロハロもログアウトしてしまい、残されたのはまたモモンガだけになった。

何となく円卓の間でサービス終了まで待つのは味気ないと思い、NPCを連れて玉座の間へと移動する。

合計で三人しか来てくれなかったものの、とても楽しい時間を過ごせた。二人が来るなりるし★ふぁーはニヤニヤと説明をし、モモンガの姿を見せては自分が笑っていた。けれどみんなも釣られて笑ってしまい、しんみりと終わることは無かった。

それを見て、彼の目的は……とも思ったが、そうでは無かったようだ。

モモンガは手元に映る、一件のメールを眺める。そこには、『やっぱり、女性アバターでも良かったんじゃない?』とだけ短く書いてあった。

「あはは。そんなこと言うためだけに世界級アイテム使うなんて、勿体ないことするなあ。私だって隠してたわけじゃ無かったんだし」

ただ、ギルドメンバー——特に男性陣はほとんど気づいていなかった。鈴木悟のリアルの姿が、女性であることに。

「——あれ？」

強制ログアウトが始まる時間になっても、電子音が聞こえない。恐る恐る目を開くと、目に映るのは煌びやかなナザリックの景色だ。

「終了が延期になった？」

よく分からないままにコンソールを開こうとして、出ない。いや、カーソルも、ゲー

ジも、時間も。何も映っていなかった。

代わりに映ったのは、動かすアバター。そのローブから出る、——生身の肉体だった。

「……………え？」

序章

王国戦士長と私 (一)

「くそつ。この村も遅かったか……」

眼前に広がるのは、凄惨な光景。

地面に横たわる村人たち。正確には、引きずり回された挙げ句、無造作に棄てられたと言ふべきだろうか。その遺体からは一面を染め上げるほどの血が流れ、辺りには焦げた肉と鉄粉を混ぜ込んだような、吐き気を催す臭いが漂っている。

彼らの傷は一つではない。腹や背中、四肢に向けて、無慈悲に振り下ろされていた。しかもそのどれもが、明らかにわざと急所を避けているという事実。

それは抗う術など持ち合わせていない無辜の民へ何度も剣を突き立てたことを、ガゼフにはつきりと教えていた。

——彼らはみな、苦悶の表情を浮かべたまま亡くなっている。

ガゼフは見開かれていた村人の目を閉じてやり何度目か分からないほどに繰り返された黙禱を捧げると共に、目の前に広がるこの凄惨な光景をまた、その心に刻んだ。

——王からの御命。

『辺境の村々を帝国の騎士たちが荒らしまわっている。それを退治せよ』
それを為すべく、ガゼフたちは村を駆け回っていた。

王国に住む無辜の民が理不尽な暴力に苦しんでいると聞いて、王国の守護者であるガゼフが止まるわけがないのだ。

生き残りがいれば少ない部隊を分けてでも国まで護送させ、寝る間も惜しんで破壊された家屋を片付け、また生存者を探す。

ただ、どれもあと一步。一足遅かった。

ガゼフたちが辿り着く村は、どれも既に手遅れだったのだ。それは時に、生き残りを残してでも次の村に向かっていているようにも見え、ガゼフの心に一抹の不安を植え付けていた。

普段よりも貴族の横やりが強く、国宝であるガゼフの完全装備を身につける許可は出なかった。

ガゼフの最も信頼できる部下たち——戦士団の皆を、城の防備という名目で二分され

てしまった。

きな臭いとも言えるが、それがどうしたのだ。そんなものは、言い訳にすぎない。すすり泣く、残された者の嗚咽も、親の遺体へとすがりつく幼子の姿も。自分が間に合えば起こり得なかつたものなのだ。ガゼフは血がにじむほど強く拳を握った。

「——戦士長！」

ガゼフたちは騎士の進んだ方向から次に狙われると見ていた、カルネ村を認識する。

その馬上より見えた家屋が、無事に残っていると分かつただけでも、自分たちは間に合つたのだと、部下たちと同様にガゼフは微かに安堵していた。

しかし、その村から煙が上がるのを確認し、全員の顔に緊張が走る。

今度こそ間に合つてみせる。この手で民たちを守るのだと。

ガゼフは手綱を握る力を増し、歴戦の戦士の顔をした頼もしい部下たちへと叫ぶ。

「ああ。急ぐぞ——っ！」

「——はっ！」

だが馬を急がせ村が間近へ迫ると、ガゼフはおかしな事実気づく。

——静かすぎるのだ。

間に合わなかつたのであれば、己を責めよう。

間に合ったのならば、外敵を悉く倒してみせよう。

一筋の煙だけが上がるのみで、他は一切の痕跡が見られないのは、明らかに不気味だ。ガゼフが怪訝に眉をしかめていると、村の門の先、そこへ佇む二人のシルエットを捉えた。

「あれは……」

片方は見慣れた、一般的な村人だ。年が高く、恐らく村長だと思われる。

——その隣にいる人物。

まず視線が引きつけられる、怒っているような、泣いているような顔を表した不思議な紋様をした仮面。

そして身にまとう、王家の者が着用するものであっても見たことがないほど豪華な装い。

ご丁寧に手袋までしており肌を一切露出していないその御仁はまさしく、不審な人物だった。

——味方か。それとも……、

ガゼフは顔に緊張を浮かばせたまま、普段よりも強く声を上げる。

「私はリ・エステイーゼ王国、王国戦士長ガゼフ・ストロノーフ。王の御命令により辺境の村々を襲っている帝国の騎士を倒すため参上した」

「王国戦士長……」

村長らしき男が呟く。

ただ、その言葉に含まれる気持ちは理解ではなく懷疑。明らかにこちらを警戒していた。

それに、「帝国の騎士」という言葉に対し全く疑問を抱いていない。となればやはり、この村にも騎士が襲撃しに来たのは確実だろう。

そして、おそらく村人だろう。多くの人間が村の中でも一際大きな家に集まっているのをガゼフはその鋭い知覚で把握していた。彼らは恐る恐るこちらを伺っているが、主な視線——例年の帝国との戦争中、民兵が自分へと向けるものと同種のそれが、ガゼフの目の前で泰然とした態度で構える仮面の御仁へと集まっている。

それによりガゼフは、彼がこの村にとってどのような立ち位置なのか少しだけ察せられた。

ガゼフが周囲から読み取れる情報より推測していた時、仮面の人物は村長へ耳打ちするようになづく。そして発せられた声はある意味、ガゼフの調子を外した。

「——どのような人物で？」

「いえ、私も詳しくは……。御前試合で優勝し、国王陛下から召し上げられたほどの人物としか……」

「ほう……」

仮面の裏から好奇心の籠もった視線がガゼフに向けられる。その視線はガゼフの腕や剣に長い間留まっていたので、彼女はこちらの実力を計っているのだと察する。

「この村の村長だな？ 隣の御仁は誰か、教えていただきたい」

「——それには及びませんよ。初めまして、王国戦士長殿。私は鈴木悟。この村が襲われているのを発見し助けにきた、旅の魔法詠唱者です」

村長が口を開くのを手で制し、ゆっくりとお辞儀をする彼女の言葉に村長も怪訝な顔をしていないことからそれが真実だと分かる。

ガゼフは馬より降り、悟と名乗る人物へ重々しく頭を下げた。

「この村を救っていただき、感謝の言葉もない」

「いいえ。私も偶然通りかかり、報酬目当てで助けただけです」

「そうか——」

彼女の言葉は納得のいくものであったが、どこか演じているような雰囲気醸し出し、それをあえて感じ取らせているような、王の側に長年仕え、人を見る目が培われてきたガゼフだからこそ分かる程度の違和感を覚えさせる。

掴みどころのない人物だ、とガゼフは思う。

「では申し訳ないが、今の状況について詳しい話を聞きたいのだが？」

「私は構いませんよ。村長殿はどうですか？」

「ええ。もちろんです」

「ここで立ち話という訳にもいきませんし、一度腰を掛けて話しませんか？ 村人たちも、このままでは気が休まらないでしょう」

「一理あるが……」

襲われた後の村を連日見てきたガゼフからしても、それは同意する意見だった。

実際、こうして立っている村長でさえ顔色は優れない。村長という責務から自分を保っているのだ。

だが、素直に領けない理由もある。

騎士が退散したとするならば、ガゼフは直ぐにでも追いかけてなければならぬのだ。騎士であるからには、何らかの任務に基づいて動いているはず。それが村を襲い虐殺することであるならなおのこと、他の村へと向かっているだろうから。

ガゼフの心中を察してか、悟は落ち着いた声音で口を開く。

「ご安心ください。この村を襲った騎士のほんどは殺し、捕虜も確保しております。なので伏兵がいても、しばらくは動かないのではと考えます。その辺りも詳しい説明が必要でしょう」

「……なるほど。それは全て貴方が？」

「はい。これでも多少は腕に自信がありますよ」

「ほう……」

今度はガゼフが改めて目の前の女性の力量を把握すべく観察しようとするが、先ほど彼女は魔法詠唱者マジック・キャスターと言った。戦士であるガゼフでは、魔力のような物を見ることもできないためその実力を測ることはできない。ならば他のところから察するしかあるまい、とガゼフは決断する。

「その仮面は？」

「そうですね……」悟は一瞬考え込む。「身の安全を守るため、ですかね」

「外していただいても？」

「申し訳ありませんが、お断りします」

「……………」

ガゼフの強い視線も、まるで意に介した様子は無い。要するに、素性を教える気は無いということか。

「——ところで戦士長殿。それに部下の皆さんも。この村は先ほど騎士たちに襲われたばかり。武器を持たれたまま村に入られては、彼らの恐怖が蘇りかねません。よろしければ剣を置いていただきたいのですが？」

「それは出来ん。これは我らが王より賜った物。それを王の御許可無しに手放すわけに

はいかないのだ」

悟は肩を竦める。

(なるほど。信用ならないのはお互い様という訳だな……)

「——鈴木様」

「村長殿」村長の視線に、彼女もその意を理解したように頷く。「……、申し訳ありません。差し出がましいことを」

「いや、貴方も正しい。もしこの剣が王より賜った物でなければ喜んで置いただろう」

——素性は分からん。だが彼女が村を救った人物であるのは確かか。ならば、村の状況を聞いておいた方が良からう。

ガゼフは目の前の人物に対する疑問をひとまず棚上げし、そう頭を切り替えることにする。

「——では、話を聞かせてくれるか？」

「かしこまりました。それでは私の家で——」

「——戦士長つ!!!」

村長の声は、駆けてきたガゼフの部下の叫びによって遮られる。

周囲を警戒させていた部下が一人、ガゼフの元へ走ってくる。

その顔に浮かぶのは焦燥。

——ガゼフが数日来、背中にずっと感じていた嫌な視線、その正体を突きつけられることになる。

「どうした？」

「——っ！ 敵影を補足。等間隔に散開し、こちらへと徐々に近づいている模様。囲まれています！」

ガゼフが舌打ちを一つこぼし、

「誘い込まれたか……」

そう呟いた顔には、苦虫を噛み潰したような渋面が浮かんでいた。

王国戦士長と私 (二)

「——鈴木殿。よければ雇われないか?」

包囲されていると分かったガゼフは敵の正体を察すると悟へ助けを求めた。

前衛がおらず、魔法詠唱者のみで構成された部隊。

召喚されたであろう燃え盛る剣を握った純白の天使。

また統一された特徴のある法衣は、王国の最高位冒険者パーティーである『蒼の薔薇』のリーダー、ラキユース殿から聞いたスレイン法国の特殊部隊——陽光聖典のそれと酷似していた。

彼女らと相対し痛み分けとなった事実はつまり、向こうの実力がアダマンタイト級だという証。部隊を割き、装備も十分ではない今の自分たちでは、勝ち目が余りにも薄かった。

だが、目の前の御仁がいれば možい、と。

「お断りします」

しかしその淡い希望は、容易く打ち砕かれる。

「私は王国の人間ではありませんし、国家間の問題に首を突っ込むほど愚かではないつもりですよ」

そう言われてしまうと、もはやガゼフに説得の余地は無い。

彼女の言い分は正論であり、ガゼフが狙われている段階でこれはスレイン法国とり・エステーゼ王国の問題となっている。

彼女の取る立場は中立。無理に参加させようとしても、ガゼフの望む方向へ譲歩を引き出すことさえ出来ないだろう。

そうなれば良くない状況が、最悪にもなりかねない。

「そうか……」

ガゼフは考える。

せめて、村人たちだけでも助けられないかと。

この御仁がいなくなり、ガゼフが敗北したとすれば、この村も襲われかねない。いや、王国の力を削ぐことが目的であるとすれば間違いないだろう。

「鈴木殿。此度はこの村の者たちを助けていただき、重ね重ね感謝する」ガゼフは本心から、我が儘と言われるであろう願いを口に出す。「そして願わくば、今一度この村を守ってほくれないか」

「……………」

「頼む——」

ガゼフがその膝を折り頭を下げようとするのはしかし、途中で遮られた。

「そこまでされる必要はありません。あなたが頭を垂れる相手は私ではないのでしょうか？」ガゼフを立たせ、悟は力強く誓う。「約束しましょう。この村の者へは指一本触れさせません」

頼れるその言葉にもはや心配は起こらなかつた。

後は自分が、戦士長としての責務を果たすだけだ。

「ならば後顧の憂いなし。私は前のみを見て進ませてもらうとしよう」

「そうですか……。——死ぬかも、しれませんよ？」

はつきりと断つていながら。

なぜか不安げに、暗に「死ぬぞ」と告げるその瞳に——。

「それでも、私は王国の民のため、立ち向かわなければならぬ」

——そう、ガゼフは獯猛な獣のような顔で笑った。

それに対して悟は、まさに信じられないものを見たといったようにガゼフの顔を凝視する。

仮面の奥で諦めているようにも、懐疑的なようにも見えたその瞳が揺れ、やがて遠く

の誰かを、ガゼフの背後に捉えたような気がした。

彼女はそれから少し寂しげな声音で、ぽつりと呟く。

「ふふ。——そうだな、……」悟の手が滑らかに仮面をなぞり、隠していた素顔を風にさらす。「やはり少しだけ、手をお貸ししましょう。——戦士長殿」

その急激な変化にガゼフは呆気にとられる。

辛うじて発することが出来たのは彼女の言葉ではなくその手に握られたものに対してだった。

「——仮面、よろしかったのか？」

「ええ。……もう、必要の無い物です。貴方の人となりは充分、わかりましたから」

そう告げた彼女の顔立ちにはガゼフと同じ南方の血を思わせる、黒い髪に同じ色の瞳。豪華な装いに見合う取り立てて美しい容貌では無かったが、その漆黒に輝く瞳は芯のあつ力強い光を宿していた。

「敵がこのまま、この村へ向かって来ないとは限りませんし、私も下手に被害を受ける訳にはいきませんからね」

そう口実づけた彼女はガゼフの返答も待たず少し考える仕草を取り、やがてガゼフら戦士団に向け徐にその黄金に輝く美しい杖を掲げる。

「——それと、こちらをお持ち下さい」

差し出されたのは魔力も感じられない、何の変哲もない木彫りの小像だった。しかしわざわざ渡したということは、何らかの意味があるのだろう。

「君からの品だ。ありがたく頂戴しよう」

「——では、御武運を祈っております」

ガゼフは重々しく頷き、部下を率いて直ぐに馬を走らせる。

力強い意志によつて駆けるその姿はまさに、英雄そのものだった。

相手の人数は少ない。それにも関わらず包囲を選んだのは、こちらを確実に封じられる手段があるからだろう。

それはつまり、ガゼフが強行突破を計るのが最も悪手であるのかもしれない。

けれどガゼフら戦士団に取れる手段はそれしかないのだ。

今ある手札の中で、最良の選択を。

ガゼフは魔法によつて滾る力に後押しされ、部活へと振り返る。

「敵に突進攻撃。一撃を加え奴らを損耗させた後、タイミングを見て撤退する」

頼りがいのある威勢の良い返事を背負い、ガゼフは咆哮を上げる。

「行くぞっ！ 奴らの腹に風穴を開けてやれ!!」

「「おおおおおおお!!」」

拍車をかけられた馬が全力で大地を蹴り上げる。

一気に駆け出す馬が波のように押し寄せる中、冷ややかな声が場を切り裂く。

「——任務開始」

包囲していた神官が手をかざした瞬間、——ガゼフの馬がその身体の制御を失ったように暴れ回る。

訓練された馬がこのような動きを見せるのは、精神操作を受けた時だけだ。

そう判断するや否やガゼフは馬から飛び降り、周囲の状況を見渡す。

すると部下が手を伸ばすよりも速く、命令を受けた天使の一体がガゼフ目掛け一直線に向かってくる。

ガゼフは素早く剣を抜き放ち、一閃。

それだけで、天使は構成していた魔力の粒子となって空中に霧散する。

「緩い」

今のガゼフからすれば、天使の動きは王国の民兵と同じくらいだ。

祝福を受けた武器が、天使の抵抗も難なく打ち破ってくれる。

行ける。勝てるぞ。

部下の口から零れる言葉。

士気の高まった彼らが雄叫びを上げながら空を舞う天使へと切りかかっている。ガゼフもニヤリと猛々しく笑い、部下たちと同じく叫んだ。

その様子を冷ややかに見ていたニグンは、僅かにその眉を顰める。

上位天使は第三位階魔法によって召喚されているため、いかにガゼフと言っても武技を使わなければ一撃で消滅させられることは無いと踏んでいたからだ。

王国最強の男が放つ見事な剣閃にしかし、ニグンの胸中にあるのは間違った情報を渡してきた本国の神官長らに対する苛立ちだけ。

舌打ちしたくなる気持ちを抑え、その小細工を暴こうと隙なく観察する。

国宝の一つか。はたまた武技か。

どちらにせよ死ぬまでの時間が延びるだけだ。

ならばもう少し、この愚かな男に付き合っつてやるのも悪くない。そして同時に、天使の数をサーブスすることも忘れないでやる。

高慢であろうと油断せず、確実に。

いかなる時も、冷静な判断力と観察眼を持っていなければ精鋭たる陽光聖典の隊長など任せられない。

「再び天使を召還せよ。ストロノーフに集中して魔法も放て」

ガゼフがさらに勢いを増し、人間を超えた速さで迫る。

この猛進する男を止めるためには一度、天使を防御に回すべきだろう。

そこで何も言わなくとも天使たちを集結させ壁を構築した部下は流石だ。隊長である自分の意をよく分かっている。

「気にするな。獣が檻を引つ掻こうとも、決して壊れることはないと教育してやれ」

放たれた魔法は精神系が多いものの、純粹な攻撃魔法も混ざっていた。

それも部下が修得している最高位、第三位階のそれだ。

「……教育だと言っただろう。様子を見る前に潰してどうする」

確かに殺すことは決定事項だが、それにしてもまだ抑えるべきだろう。

過剰に警戒してやりすぎてしまった気がしないでもない。

これでは先ほどの言葉も取り消すしかあるまい。

（全く。原形が分からないほど細切れになっっていなければ良いが、——）

「《六光連斬》」

煙の中から放たれた剣撃が、その直線上にいた天使を全て両断する。

そして現れたその姿に、普段より冷静かつ傲慢な態度を崩さない隊長と部下から思われていたニグンであつても動揺を隠し切れなかった。

「なに？」

ガゼフは少し汚れているものの、それは傷ではなく砂煙によるもの。ガゼフ自身は全くの無傷だった。

精神作用は抵抗できるとしても、攻撃魔法は防ぐ手段は無かったはずだ。

またニグンは戦況を観察し、はたと気づく。

自分の部下が召喚した天使が、戦士一人と拮抗している状況に。

——いや、何とか凌いでいるだけだ。

ガゼフの部下は徐々に生傷を作り、汗を滲ませながら懸命に剣を振り回している。

天使がガゼフと直接対峙した時以外、新たに召喚された様子もない。

しかし精鋭と言っても帝国の一般兵に毛が生えた程度であつたはずの戦士たちに手こずっている間に、ガゼフが自らに向かう天使を難なく屠っていく。

さらに不可解な事に、やつが疲労する気配は皆無。

勝負では無い一方的な処理だったはずが、どこか細部からは異様さが見え隠れしている。

「……………」

「プリンパリテイ、オプザバイション
監視の権天使、動け。」

「むっ……………」

ガゼフの顔に焦燥が宿る。それを見れば、心に少しは余裕が戻ってくるというもの

だ。

監視の権天使はその特性上、ニグンの前に留めておくのが正しい配置ではある。

しかし第四位階の魔法によって召喚されるこの天使は、ニグンの才能タレントあつて炎の上位天使アーケンジェル・フレイムより単純に強い。

さらに、そこへ加えて部下たちが向ける魔法、複数の上位天使。

どう足掻こうと消耗は避けられず、捌けなくなれば後は緩慢な死を遂げるだろう。

最も確実に信頼できる作戦は何かと聞かれれば、ニグンは確信を持って言える。

それは圧倒的な物量でもって押し潰すことだと。人智を超えた領域の存在ではないニグンにとつて、充分に熟達した部隊によるこれこそが、何よりも信じられるものだった。

ガゼフの剛腕によって振るわれた斬撃は容易く上位天使を屠っていくが、次の瞬間にはそれを倍する数の天使が迫る。

先ほどまでと違い、最低限天使を捌きこちらへと駆けてくるのは捨て身の突貫だろう。

さらに振るわれた一刀でまた数体の天使を切り捨てるが、腕が伸びきったタイミングで別の天使が炎の剣をもってガゼフへと肉薄する。

「《即応反射》」

人では有り得ない動きで、ガゼフの腕は剣を振るう前の状態まで戻る。

「流水加速」

ガゼフは剣を振りながらも、決してその足を止めることなく駆ける。その先に見据えたニグンだけを狙い、彼の神経は際限なく研ぎ澄まされていく。

武技は万能ではない。

魔力とは異なるが精神力とでも呼ぶべき物は確かに存在するのだ。

それはつまり、武技をこのまま消費し発動出来なくなつた瞬間こそ、ガゼフの最後ということだ。

しかし、ニグンは何故か嫌な予感がした。

自分たちは罠にかかった愚かな獣を狩るはずだったのだ。それがこうも拮抗と言え
る状況に持ち込まれている。しかも敵は未だ正体の分からない支援を受けている。

ニグンの手が無意識にベルトに繋がられた物へと伸びる。

(至宝を……いや、それには及ばない！ 何を弱気になっている、ニグン・グリッド・ルー
イン。こちらの隊員に脱落者は出ていないのだ。直ぐにでもやつは膝を折る)

——ドゴツ。と鈍い音を立てガゼフは初めて距離を開けた。正確には、権威の主天使
の攻撃による衝撃を後ろへの跳躍によって分散させたのだ。

痺れる両手を何度か握り、問題がないことを確認している。

そしてガゼフが目の中の敵へ再度視線を向けた瞬間、——その背後から声にならない叫びが響いた。

ガゼフの部下——戦士の一人が、自らの首へと突き刺さった炎の剣が抜かれると同
時、力無く崩れ落ちる。

それを引き金として、戦士たちは耐えきれず天使に押し込まれていく。

その急な弱体化と戦闘が始まってからの時間を考えると、やはり支援魔法の類だった
か。

術者が潜んでいるならば、魔法が切れる前に何らかの手を講じただろう。

それが無いということは、ガゼフが時間を稼ぎその隙に村人を逃がす算段だったの
か。

元より獲物を誘うための餌でしか無かった村の襲撃ごときを警戒し、自分から戦力を
無意味に減らしてくれるとは、何とも無駄な考えをしたようだ。

最も可能性が高いのは冒険者だろうが、ニグンの見立てではこれほどの支援魔法を扱
える王国の者は自らの頬に消えない屈辱を残したあの邪教徒の他にいない。

しかしガゼフが情報通り劣った装備で現れたことを考えると、あの女がいることは無
いだろう。

念のため羊皮紙スクロールでも持たせていたか。地方の村には薬草の採集やモンスターの討伐

など依頼の数は少なくない。それらを受けるパーティーなど高くて鉄級アイアンではあが、魔法詠唱者の一人はいるだろう。そうすれば、羊皮紙は扱える。

フランスの作戦が漏れていた可能性は有り得ないが、確認した後に本国へ報告すべきだろう。

——とまれ、今は任務を終えるのが最優先だ。

徐々に数を減らしていく部下を振り返ることなく此方を睨むその姿は手負いの猛獣のように、確実に致命的となる最後の一撃を狙っている。

「天使を固めよ。油断なく確実に殺せ」

ニグンの指示によって並べられた天使は、それだけで膝を折って恭順しなければならぬと感じてしまうほど、強く高潔な壁であった。

——だが。

それでこの男が、王国最強の戦士が屈することなど断じて有り得ない。

瞳には力強い光を、——ただひたすらに突き進む一振りの剣としての輝きを宿し、ガゼフは駆ける。

「どけえええええっ!!」

ガゼフの剣筋が再び分裂し、天使たちが大量の粒子となって消える。

しかし遠い。ニグンの姿すら、分厚い壁に遮られて何うことはできない。

「またガゼフは一人。手数が足りなくなった分は、自らの肉体へと帰ってくる。
「ぬぐつ……!」

ガゼフの猛攻を縫って、天使の剣が腹部へ深々と突き刺さった。
炎で作られたそれはガゼフの肉を焼き、ぶすぶすと不快な臭いが漂う。

次の瞬間にはその姿を消したが、それで時間を与えてくれるほど優しい相手ではな
い。

「監視の権天使、やれ!」

「《流水加速》」

再び爆発的な加速を得て跳躍したガゼフは、周囲の光景を置き去りにした。獲物の喉
笛を噛み切らんと飛びかかる猛獣のように、凜猛かつ躊躇いなく一直線に向かう。

大きくメイスを振りかぶった主天使の腹へと狙いを定め、剣を握る手には一層の力が
こもる。

「うおおおおおつ!!」

「《魔法抵抗難度強化・恐怖》」

「——っ!?!」

止まることなど無いと思われたガゼフの動きが、一瞬だけ硬直する。

下からガゼフへと向けられた魔法は、即座に抵抗^{レジスト}できるレベルであつてもこの場に

あつては致命的となり得た。

「ぐは……ッ!!」

主天使の振るうメイスがその頭部へと直撃し、ガゼフは地面に叩きつけられる。

それは鈍い音を立て、同じ力でもって跳ね返される。

共に凄まじい勢いであつたためか、ガゼフはまるでボール玉のように再び宙に打ち上げられる。

——勝つた。

ニグンは自分が安堵したことに僅かな怒りを覚え、舌打ちをする。

当然の事なのだ。少しばかり不可解な事態に陥っただけで、結果は何も変わらない。

「ふっ。ずいぶんと手間を——ッ!？」

ニグンは鋭い知覚で察した。

死したはずのガゼフの振るう剣の切っ先が何故か、自分の身体へと届いていることを。

そしてそれが、確実に致命傷となることも。

「——っ、おおおおお!!」

ガゼフは雄叫びを上げ、今度こそ渾身の一撃をニグンの身体へと撃ち込んだ。

「……はっ。……はっ」

ガゼフは勢い余って倒れかけるが、力強く踏み出した足で耐えた。

陽光聖典の隊員を殺さんばかりに睨みつけると、彼らは我知らず一步後退する。

その間に主天使によって殴られた箇所を触ると、陥没どころか出血すら見られない。

それはまるで、殴られたという事実が綺麗さっぱり無くなってしまったように。

ガゼフの脳裏に浮かぶのは先ほど悟と交わっていた会話。

『《一魔法持続時間延長化・光輝緑の体《エクステンドマジック・ボディ・オブ・イファルジエントベリル》》』

『これは……』

ガゼフの身体を包むように、淡い光の膜が広がる。

『この魔法は一度だけ、打撃によるダメージを完全に無効化できません』そう告げる悟の声に嘘はないと分かった。『だからこそ、使うタイミングには注意してくださいね。――』

――ずっと狙っていたのだ。

この一瞬を、ガゼフを倒したと相手が確信出来るほど、こちらにとって致命的な攻撃が来るタイミングを。

指揮官の召喚した天使が迫る中、ガゼフは確かにその効果を発動していた。ガゼフは防御系の武技を修めておらず、またそれはスレイン法国にも知られていることだろう。

だからこそ、唯一の活路はここだったのだ。

もちろん打撃の衝撃は無効化できても、地面との衝突はその対象外だった。

さらにそこから間髪入れずに起き上がることに、武技を多用してやつと一度。

ガゼフは、その賭けに勝ったのだ。

そして――、

「ふっ」

乾いた笑いが、黒い空に溶ける。

「お前の負けだ。――ガゼフ・ストロノーフ」

だがそれを零したニグンはしかし、額に滲む脂汗を拭う余裕さえない。

肩から入った刃は確かに、ニグンの身体を無惨に引き裂いた。

傷口からどくどくと流れる血は止まらず、法衣が赤黒く変色していく。中に着込んだ

鎖帷子は、もはや見る影もない。

それでも間一髪、ニグンは反応したのだ。

それは、格闘技術をも修めることを求められる陽光聖典、その隊長ならばこそだった。

目の前に立つ男へと怒りを隠さず、腰に手を伸ばす。

——何かがずつと、頭の中で警鐘を鳴らしていた。

今すぐこの目の前で毅然と立つ存在を消し去らなければ、と。

その焦りが、至宝をついに握らせた。

「喜びたまえ。貴様が本来見ることの叶わなかったであろう至高の存在でもって、この世を去ることが出来るのだからな」

ニグンは高らかに、手に持つ宝を掲げる。

「見るが良い。最高位天使の尊き姿を！——」
ドミニオン・オーソリテイ
 《威光の主天使》ツ!!!」

——信徒の呼び声に応え、天より顕現する大いなる神の御使い。

人間では到底敵わない相手であると本能が教えている。

……全く、何を勘違いしているのか。

ただでさえ限界の脚は今にも崩れそうで、立っていることすら全神経を使っていると、いうのに。

持てる手段の中で万全を尽くした。

さらに普段では考えられないような強力な支援も得た。

……それでも、自分は届かないのか。

(これが、やつらの切り札か)

確かに目の前で悠然と佇むその姿は美しく、ともすれば祈りたくもなる。

ガゼフでさえ、今にも頭を垂れてしまいそうだった。しかし、――

「俺の生涯で仰ぐ御方は王のみ！ 王国を汚す貴様らの信仰する邪神の使いなどに、負けるわけに行くかあああああ！」

「安心しろ。せめてもの情けに、苦痛なく殺してやる」

瞬間、――天が墜ちたと思つた。

辺りは眩い光に包まれ、視界が覆われる。

自分の肉体だけでなく魂までも消えてしまいそうなその光に、ガゼフは初めて諦めの色を浮かべた。

己を信じ送り出してくれた王に心から謝罪をする。

そしてふと、心の中に浮かんだ思いに苦笑した。

(……鈴木殿)

この魔神さえも超える力を前にすれば、ただの人間が敵うはずも無い。なぜ今日会つたばかりの人物に、ここまでの信頼を寄せられるのか。

――そんなもの、問われるまでもない。

あの強く毅然と発せられた言葉を戦士として、いや、一人の男として信じない訳にはいかないからだ。

彼女の覚悟を決めた瞳に、何が映っていたのかは分からない。しかし彼女ならばきっと、村の民を守ってくれるだろう。

そう確信して、ガゼフは意識が薄れゆく中、最後の言葉を託す。

「……任せただぞ」

そして、ガゼフの意識は光に吞まれた。